



猫が「警備」 被災地のイチゴを守る

渡辺さんの栽培ハウスの周囲を歩き回る飼猫。ネズミの食害からイチゴを守る役割を期待されている=2016年1月13日、宮城県山元町(写真:河北新報オンライン)

we support!
RQ
災害教育
センター

MONTHLY

「東北に黒糖を送ろう!大作戦しんぶん」改め
復興支援『すけさきた』
「すけさきた」とは
宮城県登米市あたりの言葉で
「ボランティアに来たよ」という
意味である

(河北新報オンライン)宮城県山元町のイチゴ生産者の間で、ネズミによる食害を防ぐため、栽培ハウス内で猫を飼育する動きが出ている。東日本大震災で被災した沿岸部でネズミが繁殖し、丹精込めて育てたイチゴの実を食い散らかすケースが相次いでいるためだ。同町は震災前に「仙台いちご」のブランドで知られた東北一の産地。震災復興を目指す生産者は衛生面に配慮しながら、心強い助っ人に守りを託す。

津波で被災し2014年に営農を再開した農業渡辺成寿さん(62)は、昨年春から雄猫3匹を飼う。猫は国の復興事業で整備した「いちご団地」にある約50アールの大型栽培ハウス周辺を歩き回る。猫は、イチゴの実に興味を示さず、人間の腰ぐらゐの高さのベンチで栽培していることもあって猫が直接イチゴに触れることはまずないという。実をパック詰めにする作業場にも猫を入れず、配慮を徹底している。

生産者仲間から猫を飼って効果があった話を聞いて採り入れた。渡辺さんは「猫の気配に気付くからか、今季はまだ被害がない。ネズミはイチゴの実に付いている種が好物。かじられたら売り物にならなくなるので助かっている」と3匹の猫の奮闘に感謝する。

町などによると、ネズミは震災の津波をかぶった地域で繁殖しているとみられる。食害を恐れ、イチゴの苗を土に直接植える土耕栽培の再開に二の足を踏む農家もいる。

町内では、津波でイチゴ生産者の9割以上が被災。これまでに52戸がいちご団地で営農を再開した。



福島県内で発見された遺体 すべて身元判明

そして
もうすぐ
5年目の
3月11日が
やってきます



(毎日新聞デジタル版)福島県警は19日、東日本大震災直後に同県いわき市久之浜町で見つかった男性の遺体について、入れ歯や遺骨の特徴などを調べた結果、近くの建設業、鈴木秀勝さん(当時60歳)と確認したと発表した。福島県内の震災による死者とみられる身元不明遺体はゼロになった。身元不明遺体がゼロになるのは、岩手、宮城、福島の被災3県で初めて。

県警によると、遺体は2011年3月14日にがれき撤去をしていた作業員が見つけた。焼けた状態で損傷が激しかった。入れ歯の形状から歯科工士や歯科医師を割り出し、カルテから鈴木さんの可能性が高いことが判明。更に遺骨の特徴と鈴木さんが生前に医療機関で撮影したレントゲン写真の記録が合致し、鈴木さんと判断した。遺骨は18日、遺族に引き渡された。

死者として計上されていたため福島県内の死者数は1613人で変わらないが、行方不明者数は1人減り197人になった。(宮崎珍樹)

<MOK、半年ぶりに登場!>震災を機に石垣からふるさと宮城県に戻り、すけさきたに東北復興の便りを寄せてくれる、花と音楽を愛するタイ式マッサージセラピスト。(「すけさきた」の名付け親でもあります)

MOK、東北Now ←東北風土マラソンに

出走します!

すけさきた56号に掲載されていた、おいしいものを食べながら走れる「東北風土マラソン」に、ランナーとして参加することになり、連日トレーニングに励んでいます。ボランティアブースでの参加にも興味があったけど、まずはランナーの気持ちになってみることにしました。今年の開催は4月23、24両日(※MOKの出走するハーフマラソンは24日)、テーマは「ドレスアップ」。走りの技術だけでなく、胃袋の許容量やオシャレセンスも重要になってきそうです。総合的にがんばらなければ!



FEBRUARY
11
2016

資料:河北新報オンライン2016.1.17、毎日新聞デジタル版2016.1.19